

経て、他都市に制度がひろがらないばかりか、市の内部においてさえこの状態では先行きがとても不安です。専門的業務においては大学院卒業のレベルが必要と感じさせるのに対し、その感覚がいかに職員だけのものであり、外部の評価とのギャップがあるかが分かります。このギャップを埋めるために、司書がいてくれてよかったという利用者の声を増すような実践を続けていく努力はもちろんです。より質の高い司書を産みだす今まで以上の制度・方法を図書館学教育の方面からも考えることが必要でしょう。

最後になりますが、この分科会に参加することにより、客観的に現在の自分の立場を確認するとともに、司書職制度を考えるうえで大変貴重な時間となりました。ありがとうございました。

エントリー・レベルの知識・技術を高める必要性

大城 善盛（同志社大学）

岩倉氏は前半、「最近の図書館行政の動向」のテーマで、「公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準（文部科学省の平成13年7月告示）「新しい情報通信技術を活用した生涯学習の推進方策について」（生涯学習審議会の平成12年11月答申）「2005年の図書館像——地域電子図書館の実現に向けて」（平成12年12月の文部省地域電子図書館構想検討協力者会議報告）について、添付資料や配布資料に基いて報告された。そして後半は、「図書館職員の養成の現状」のテーマで、①司書・司書補の講習および大学の司書課程と②現職職員の研修、の現状について報告された。現職職員の研修については、(1)国が行う事業としての①新任図書館長研修、②図書館司書専門講座、③図書館地区別研修と、(2)都道府県が行う研修の支援、について報告された。

前半の「最近の図書館行政の動向」のテーマで報告された3つの告示、答申および報告は、図書館（情報）学を教えている教員、特に司書課程で教えている教員にとっては、教える際に知っておくべき最低の知識（情報）であり、ほとんどの参加者が既に知っていたように思われる。しかし、文部科学省の担当課としては立場上、あのような報告も必要だったかもしれない。また、岩倉

氏は社会教育課に来られてまもないということもあって、フロアからの質問もあまりなかったように思われた。

後半の「図書館職員の養成の現状」のテーマの中で報告された、国が行ったり支援したりしている現職職員の研修については、岩倉氏からまとめて報告されると結構やっているな、という感想をもった。図書館職員の研修については、大学図書館分野でも国立大学図書館協議会や私立大学図書館協会等で、羨ましいほどの研修を実施している。しかし、研修の重要性は認めるけれども、この分科会のテーマである「高度な専門性を目指す図書館情報学教育」を考慮すると、質疑応答の時間にも話題にのぼったが、エントリー・レベル（entry level）の知識・技術を高めることなしには、いくら研修をやっても司書の「専門性」は堅固なものにはならない、すなわち、人的インフラは整備されない、と個人的には思った。

岩倉氏は、結論（的なテーマ）を「これからの図書館員に求められる専門性」としていた。そして、求められる専門性を、前半で報告された「新しい情報通信技術を活用した生涯学習の推進方策について」と「2005年の図書館像」に求め、「情報化への対応能力」とした。国の施策が図書館の情報化であり、情報化への対応能力に欠けた図書館員も数少なくいることから、これから求められる図書館員の専門性を情報化への対応能力に求めたことはある意味では妥当であろう。しかし、21世紀の（公共）図書館に求められる図書館員の専門性を「情報化への対応能力」だけに求めてよいだろうか。図書館員の専門性については、①利用者を知ること、②資料を知ること、③利用者と資料を結びつけること、と図書館界では常識みたいになっている。基調講演者の葉袋氏と同様、私は司書の専門性を説明するにはそれだけでは極めて不十分だと思っているが、岩倉氏には少なくともその定義を踏まえて、それを敷衍する形で説明して欲しかった。

教育部会が現職者のための講座を開く必要

堀込 静香（鶴見大学女子短期大学）

最近、図書館行政に関する、報告・答申が多く出され、行政側の図書館に対する関心が高かまっているように感ぜられる。今回の報告では、はじめに次の答申等が説明

された。

- ・平成10年12月に出された「図書館の情報化とその推進」
- ・平成12年12月文部省地域電子図書館構想検討協力者会議による報告『2005年の図書館像—地域電子図書館の実現に向けて』
- ・平成12年11月28日生涯学習審議会答申「新しい情報通信を活用した生涯学習の推進方策について」の生涯学習を担う機関としての図書館の役割について
- ・平成13年7月18日文部科学省告示「公立図書館の望ましい基準」

この中でいわゆる「望ましい基準」はこれまでに案や報告などが出された経緯をもつ。

「図書館法」第18条には「文部大臣は図書館の健全な発育をはかるために、公立図書館の設置及び運営上望ましい基準を定め、これを教育委員会に提示するとともに一般公衆に対して示すものとする」とある。社会教育審議委員会施設分科会は、1972年及び1973年の2回、公立図書館におけるサービス・運営・資料・職員についての望ましい基準の案を示したが、公示には至らなかった。1992年、生涯学習審議会社会教育分科審議会施設部会図書館専門委員会によって「公立図書館の設置及び運営に関する基準」が報告され、生涯学習局長名で各都道府県および政令指定都市の教育委員会・教育長あてに通知された。この基準では、「図書館は、生涯学習の振興を図る上で、住民の身近にあって、人々の学習を支援するきわめて重要な社会教育施設」であるという前提のもとに、市町村立図書館の運営の基本、都道府県立図書館とのネットワークの重要性について明文化された。

1972案や1992報告が実質上の基準になっていたことになる。この後、生涯学習審議会社会教育分科審議会計画部会のもとに設置された図書館専門委員会によって2000年12月に改めて具体的に示された。これを受けてさらに著作権に関する事項を追加し数的基準が削除されて、2001年7月18日告示に至った。図書館法が制定されてから50年も経ってようやく「告示」の形となったわけである。告示に至った、あるいはなぜいまだ告示に至らなかったのか、事実と内容の説明だけでなくその理由を文部科学省の立場から詳しく聞かせてほしいと思った。

養成と現状の部、公共図書館の現職職員の研修では、「国が行う事業」に相当力を注いでいる様子が聞き取れた。新任図書館長研修では、管理運営、社会技術、電子

情報サービスなどの内容で行われている。5日間。図書館司書専門講座は勤務7年以上、指導的立場にあるものが対象で、生涯学習における図書館、経営評価、情報通信技術と図書館資料、サービスの充実、などがその内容で、10日間。地区別研修では、勤務3年以上の中堅司書が対象、図書館業務の各専門領域における知識・技術の向上を図る事を目的とした4日間の講習。ほかに都道府県が行う研修の支援として補助金の交付がある。

文部科学省の講習ではないので触れられることはなかったが、大学図書館職員の場合も短期と長期の講習会が設けられ、地区別や館種別に行われる研修が様々ある。また、専門図書館や主題分野ごとの研修も少なからず行われている。

図書館員としての専門性の維持と向上に研修の重要なことは言うまでもない。サービスや業務に携わっている現職の図書館職員にとって、知識・技術の何が新たに必要になってきたのか、変化する時代の対応するにはどのようなことが不足しているのか、具体的な内容をより詳細に示してほしい。

現在の「養成の場＝大学・短大・講習」は基礎資格を授ける事にとどまっていけないのか、考えさせられた。図書館の現場で司書としての専門性を維持し高めるために継続的な教育・研修が必要なら、それは「養成の場」で行うことが当然ではないだろうか。もっと積極的に継続教育、あるいはよりスキルアップ、時代に即応した知識・技術を身につけるための研修に、我々も責任もって取り組むことを考えねばならないのではないか。一つの大学や短大と言うよりはむしろこの教育部会のような組織が現職者のための講座を開くことも必要なのではないだろうか、と強く感じた。



今秋は群馬で会いましょう！

全国図書館大会 12分科会 アンケート

基調講演 葉袋秀樹氏

- 1 体系的にまとめた、具体的に分かりやすい話でした。これまであまり気づかなかった点を指摘していただいた。もう少し時間をとって、討論の中で出た管理栄養士資格まで、話をすずめてほしい。
- 2 館種により職務内容が違うのはよくわかるので、就職し、一通りのことがわかった後にどんな研修があるかと助かる。館種ごとの資格試験後進制度などを推進されることを望みます。
- 3 専門の違いですが、もっと私立大学図書館についての研究報告を聞きたかった。
- 4 いろいろな問題点の指摘、その対応の仕方、非常に良かった。
- 5 大学図書館で資料の収集をしておりませんが、仕事の見直しの機会になりました。
- 6 結構でした。有難うございました。
- 7 充実した体系的な内容で学ぶことが多かった。
- 8 時宜にかなっていて良いと思う。古くて新しいテーマであるが、公共図書館を中心とする専門(職)性についてまとめた話を聞いたことがなかったので、有意義であった。しかし、現今、司書の就職先が激減している状況で、専門職云々ではない現状と矛盾を感じた。現況と研究とは別、というのであろうか。
- 9 論旨も明快で良かった。質疑やディスカッションをする問題点をより浮き彫りにできるのでは。そのために司役がもっと活躍するべき。
- 10 包括的な問題提起で良いものでありました。しかし、当然ながら、今日で課題の方向がよく見えないので図書館の現場、教育の現場それぞれつき合わせて議論を深めたいと思いました。われわれは、図書館学教育の内容を考えるとそこに重きを置くあまりに、「図書館運動」のことがおろそかになってきたと反省させられました。
- 11 公共図書館で働いていると、人事異動とやる気の持続のジレンマに悩まされる。今回のお話で根本的な問題を知ることができた。日本図書館協会は是非今こそ、整理して、道筋をつけてほしい。司書資格の試験には、大賛成である。いく、日常業務、や、人事課との交渉をがんばっても越えられないカベがある。後は、資格のハク付けと社会的地位の確保である。
- 12 職員の採用問題と日本図書館協会の会員減に関して、対策として考えられる一方案として(1)「図書館雑誌」の1-3月号のどれかを就職対策速習に特化し、実務教育出版等と提携して前年度各自自治体の採用実務、問合せ先、合格者の体験等をのせる。(2)「図書館情報学過去問題集」を刊行する。は実施して損はないと思う。少なくとも学生の1年間のみの入会脱退の多さは上記に関連していると思うので。利用者と管理部門が専門的サービスを体験していないため、必要性を理解していないことについては
(1) 図書館員の異動によって中断されない継続的な知識の蓄積・問題点・・・異動発令が1週間前、3人中2人を異動させる等の異動への対応策
(2) 日常業務はある程度分離し、正規職員は専門的サービスに専念する。問題点・・・派遣や臨時でさえ却下される状況ではどうするか。他部門からより日常業務の負担を要求されている場合どうするか
(3) 利用者も1-2年で異動し、しかも彼らは上司の命令による下調べで来ていて、管理部門の人間は決して現れない場合どうアピールするか。等が具体的な障害としてあると思う。少なくとも私個人の努力では状況は好転しなかった。自分の無能ゆえ、でもあるけど。

講演1: 江口昇勇氏 (愛知淑徳大学)

講演2: 田中敦司氏 (名古屋西図書館)

講演3: 岩倉公男氏 (文部科学省社会教育課)

- 1 江口氏の臨床心理士資格の更新の話と田中氏の係長級試験の話は、専門職集団の質の維持向上という点で興味深かった。自分自身は現場で働くのが好きで昇進は無関心であっても職員皆様としては守りに入って先細りしてしまっている。継続的に管理部門にも人を輩出するためのシステムが必要だと思ふ。
- (1) 司書資格のあり方を考える上で、大変参考になった。公共図書館として、非常に恵まれた環境であり、うらやましく感じた。
- 3 扱う主題・資料についての知識・経験と図書館学の技術的な側面とともに必要である専門職としての司書の教育をどう行うのか。深くまた高度な知識技術の必要な場所と(主題にかかわる高度のレファレンスや行政的指導)と補助的な業務とを分けて資格を考へる必要があることを・・・常々感ぜているのですが・・・今日も考えさせられた。
- 4 (1) 私々とまとめた別々の専門職のことなので、耳新しく、専門職を考へる上で、大いに参考になった。異世界の方の講演、今後もと入れてくださることを期待します。
(2) 専門職制をとっている市の実情が聞け、現状はなかなか

厳しいことを再確認。
(3) 文科省の最近の政策についてのまとめた報告で、文科省の施設の動向、取り組みの説明で時宜にかなっていた。

- 5 講演1, 2は特に有益であった。
 - 6 講演1 司書職に対する有益なモデルを提供され、非常に良かった。
 - 7 専門性に対する姿勢、のぞみ方を江口氏より、また図書館職員の専門性の実務については田中氏よりいろいろと聞くことができてためになったと思う。
(岩倉氏の講演は大変つまらなかった。資料を読みあげるだけで目新しいものがなかった。まして、文部科学省の役人で今年4月からしか図書館関連業務にかかわっていない人が今大会にくるといことは文部科学省内でのこの大会の重要性が低いことを示しておりましたJLAの文部科学省への発言の弱さをみたようだ。)
- 上記修正
文部科学省の役人で今年4月からしか図書館関連業務にかかわっていない人が文部科学省を代表して発表するということは文部科学省内でのこの大会の重要性が低いことを示しておりましたJLAの文部科学省への発言の弱さをみたようだ。
- 8 1 求められる教員の要件から専門職資格の奥の深さが理解できました。司書の世界との開きは余りに大きい。もう少し近い目標が必要ではないでしょうか。
2 名古屋市立図書館の司書職制度の現実に関する勇気ある報告であり、講演者に深く感謝したい。職員制度や職員のあり方は、このような現実を踏まえて、論じなければなりません。このような現実の中村氏の論文で、既に指摘されていることですが、改めて確認できました。

その他プログラム全体についてのご意見・ご要望

- 1 教育部会として、緊急に何をすべきかという課題について集中した論議がなされるいろいろな教えられるところがありました。(今暫く集中的・継続的に高山先生が最後のまとめの中でおっしゃられたところと同じであろうかと存じます。よろしくお願ひ申し上げます)こういう問題に取り組んでいくべきであろうかと思ひます。
- 2 講演の先生方、役員の方々、どうもありがとうございました。
- 3 例年になく充実していたと思ひます。ありがとうございます。
- 4 講演の3人の方、それぞれの立場がよく問題をうきほりにしたと思ひます。
- 5 他の専門職の養成状況について江口先生のお話と同様のものをお聞かせください。
- 6 (1) 午後の講演1本1時間3連発はつらい。30分1本で十分な品質、内容、レベルでしかないのでは。
(2) 分科会のテーマに対して発表内容が散漫である。
(3) 講演者より受講者のほうがレベルや問題意識が高いのでは。
(4) (2)(3)は進行のやり方で改善する部分もあるが、司役は何のためにいるのかわからない。
(5) 10分科、12分科と一緒にして、整理してもいいのでは。
- 7 この分科会が教育部会の学習会と同じだと、大会要綱に書いておいて欲しい。(10分科会との違い) 大学関係者ばかり?! テーマだけで、この分科会を選んでしまったが、違和感を感じた。基調講演が公共図書館にかんするもので、すくわれた。参加メンバーを見て、公共図書館を経験したことがない人が司書を養成していること自体、問題だと感じた。図書館界として、司書の有効活用(人事交流、一度離職した人材バンク等々)を考へるべきだと思ふ。
- 8 具体的なスキルアップの方法をもっと提示してほしい。また、案内にあった「図書館業務のアウトソーシング」「人材派遣サービス」問題についてはまったく触れられなかったのでは? 外部発注の人の専門性が低いと諦めるのではなく、それらの人たちのスキルアップを以下に行うべきかなど、現場で、はたらいっているもの意見など、もっと話すべき人はいるのではないのでしょうか。
- 9 最近の研究者は、図書館情報の各分野の活動に深くコミットされている方も多いので、図書館大会に部会を設けること自体適切かどうか検討の必要があると思ひます。図書館大会では、各部会に参加できるようにしておいて、幹事の皆さんの負担にならない方法で、それとも、図書館大会だから、比較的開催が楽で、これだけ参加者がおおいのでしょうか。部会長ならびに幹事の皆さん、ありがとうございます。

幹事会から

- 多くの方から貴重なご意見を有難うございました。
- 1 次回以降のプログラムにおいて、時間配分(ことに午前と午後)、あるいは、講師の人数、講演時間等、慎重に計画をたてて、より充実した研究集會を目指していきたいと考えております。
 - 2 重要な課題が山積していますので、できるだけ、質疑の時間を多くとり、講師と出席者、あるいは出席者同士が意見をかかわることできるよう、努めます。

図書館学教育のファカルティディベロップメント(3) ; レファレンスサービス

大谷 康晴 (青山学院女子短期大学)

図書館学教育の ファカルティディベロップメント (3) ～レファレンスサービス～



2001年12月22日(土)
会場：日本図書館協会会館

教育部会による本年度第2回目の研究集会は、図書館学教育のファカルティディベロップメントのパート3と題して、日本図書館協会会館にて2001年12月22日に34名の参加者を集めて行われた。過去、情報検索系、図書館概論系といった科目を対象に行われてきたが、今回はレファレンスサービス演習を対象にし、レファレンスサービスの実践と演習の授業事例が報告された。

まず、高山部会長よりこれまで行われてきたファカルティディベロップメントの内容とその意義について説明が行われた後、ISIジャパンの棚橋佳子氏から「情報サービスの最近の動向と展開」と題して、供給サイドから見た情報サービスの最近の動向ということで、ISI社の事例について紹介された。ISI社といえば、引用索引があまりにも有名であるがインターネットそしてWebといった技術を活用して、単なる索引から学術情報の情報基盤プラットフォーム (ISI Web of Knowledge) を提案することに取り組んでいる。このプラットフォームでは引用リンクを中心としながらも、他の情報へのリンクを活用することによって、従来の引用索引というレファレンスツールを超えた総合的な情報環境を提供することを目指している。また、Library Schoolでの教育プログラムも紹介され参加者の関心を惹いた。

2番目に東京都立多摩図書館の石原幸子氏による「最近のレファレンスサービスの状況；インターネットを利用した事例紹介を中心に」と題した公共図書館におけるインターネットを活用したレファレンスサービスの事例が紹介された。都立多摩図書館では図書館協力で力点が置かれていて利用者だけではなく図書館からの質問依頼に対する回答も行なわれている。そのような図書館におけるレファレンス事例が紹介されていたが、最終的な回答や資料の提示はともかく、検索の手がかりとしてWebが活用されていた。また、電子メールによるレファレンスの受付も2000年6月より行われているが、レファレンスインタビュアができない、学生からの卒論・レポートの丸投げ、あやふやな質問が寄せられるという問題点があるという。また、インターネットによるレファレンスサービスを展開するための内規についても紹介があった。

3番目に四国大学の阿部悦子氏によって『レファレンス・サービス演習』の実践と展望」と題した授業の事

例報告が行われた。事例紹介の前に司書科目におけるレファレンスサービス演習の位置づけや司書科目テキストにおける情報検索との関係や主題の取り扱いを紹介した後には四国大学における事例が紹介された。この中では特に新しい取組みとしてコンピュータを活用した授業形態への取組みとして、参考図書解説にOHCあるいはプロジェクトの利用、また電子掲示板を活用した学生とのコミュニケーション、学生によるプレゼンテーションが紹介された。

昼食休憩後最初のプログラムとなったのが、「最近のレファレンスサービスの状況；大学図書館」と題した慶應義塾大学三田メディアセンターの松本和子氏の報告である。まずレファレンス業務の変化としてレファレンス資料のデジタル化、Web利用の一般化、情報検索さらには情報技術一般の向上が必要となっていることを指摘した。また、利用指導もデータベース検索指導、さらにホームページの作成が重要になっていることが報告された。レファレンスツールもOPAC、データベース、Webサーチエンジンといった電子媒体を最初に利用することになったこと、人物・団体情報の探索、検索全般のヒントを探るためにサーチエンジンが利用され、政府刊行物・学術データベースといったコンテンツやリンク集がツールとして利用されていることが指摘された。最後にこれらの現状からレファレンスサービスの再構築が求められているとしている。

5番目のプログラムとなったのが、富士大学の斎藤文男氏による「調査プロセス比較法 (俗名：三多摩レファレンス探検隊方式) を用いたレファレンスサービス演習；明治大学のケース」と題する授業の事例報告である。まず、同一のレファレンス質問に対するレファレンス記録を並べて比較したものであり、現役図書館職員のスキル向上、レファレンス記録の作成訓練、コレクション形成で有効であるという調査プロセス比較法の概要と効果が述べられた。次に学生が実際に取り組んで回答した質問と回答事例を示しながら、調査プロセス比較法を授業に取り入れた事例が報告された。授業の効果として、自分の大学図書館に対する理解、情報探索の「とっさの一手」の習得、現職になっても対応できる記録方法の習得が報告された。

最後に鶴見大学短期大学部の掘込静香氏による『レファレンス演習』授業の事例報告」と題した授業の事例報告が行われた。毎週のレポートの提出と添削を中心とする授業の内容が紹介された。次に科目としてのレファレンス演習が内包する問題点として、基本的な参考図書の使用法の指導時期、特定の参考図書の利用の集中、書誌に関する知識と技術の習得、電子メディアのレファレンスツールが指摘された。最後にレファレンスサービス演習と情報サービス概説の関係の指導順序、内容の連続性、他科目との関連といった点で指摘した。全ての報告が終了した後に部会長より挨拶が行われ閉会した。全体的には、講演者の都合によりプログラムに多少の変更を余儀なくされたものの司会の尽力もあり無事終了した。

プログラム全体を通じて、授業の事例報告では、演習科目としての性格と履修人数、利用する図書館など個別の状況への対応が指摘されていた。さらに科目の内容・性格ということも指摘された。また、図書館の現場や情報サービス産業側の講演からは、まず電子媒体の利用という情報探索行動の変化が顕著になっていることが感じられた。個人的には、何をどのように教えるかという基本的なことから始めて情報サービス系の科目の見直しが必要ではないかと思われる。

(大谷康晴 青山学院女子短期大学)

図書館学教育部会2001年度第2回研究集会に参加して

鋤柄 欣宥 (愛知学泉短期大学)

自分の不勉強のせいで、この様な研究会がもう2回も開催されていたことも知らずに参加させていただいた研究会であった。

いま、図書館界は、特に公共図書館界は一部の図書館を除いてどの様な事態になるやも知れない曲がり角に置かれている。図書館とは、数々の先人の知識を内蔵した資料とその中から利用者が希望する事柄についての情報を提供する専門職が配置されている施設を図書館と認識して、自分も長い間それを目指して自己研鑽に励み、また館の方針を樹ててその実現に努力をしてきた。そしていま、その信条や哲学・考え方を後進に教え育む道に入っているが、現実現場はそうではなくなりつつあるような気がする。

いま、われわれが教育育てている学生たちは、一体何を目的としてこの資格を取ろうとしているのか。また、その学生を指導している方々は一体どの様な図書館の職員に育てるおつもりなのか、どうも目標も方向もはっきりしていないような気がしてならない。

公共図書館志望者には図書館法により、講習も大学における専門コースも資格取得して明示されているが、大学図書館の職員養成は同じ過程でよいものであろうかというのが私が常々もっている疑問である。大学図書館と公共図書館とはその目的、方針、対象、利用者のニーズ、その扱い、情報処理の方法、手段等いろいろな面で異にしているところが多い。

特に、今回取り上げられた「情報サービス系」では顕著な相違があるような気がする。

その点を配慮され、大変高度な情報処理の示唆から、現場における市井の人の疑問への対応の仕方など幅広い観点からのお話があり大変興味深く勉強させて貰えた。

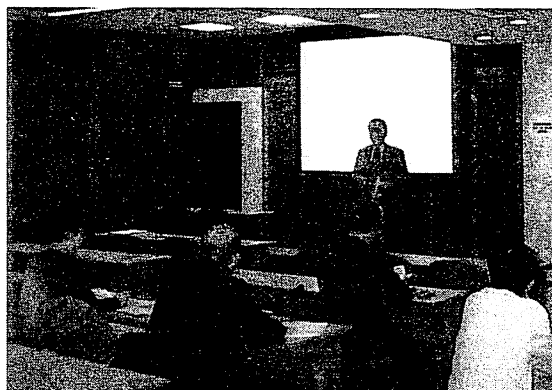
今回の発表の中には、レファレンスにおけるIT利用の報告も多くあった。確かに短時間に多くの情報が容易に入手することができるため、冊子体資料による検索を嫌避する風潮がではじめている現場にあって、図書館職員

はどの様な利用指導、または案内をしたら良いのかで迷っているか、または放棄してしまって全てを機械まかせにしている。

いま、学生にレファレンス演習として課題をやらせてみる(実はインターネットでは出てこないものとか検索が難しいもの)とインターネットだけに頼ってしまい「レファレンスブックで調べれば有るよ」といっても「どうしてそんな重い大きな本で調べなければならないの?」という言葉が返ってきたり、インターネットで検索できなかったものは「資料なし」として答えてくる有様。勿論許しはしませんが、機械検索だけで済ませてしまって良いものであろうか。「レファレンス サービス」とは何かが何処かで欠落してしまって「レファレンス」という業務処理だけになりつつあるのではないかと悩んでいる。「サービス」という心がどこかへ行ってしまったのが図書館の現状であろうか。

この「情報サービス系」の授業でこそ方法的技術の習得は勿論必要なことではあるが、更に利用者に対する協力、協調、援助等の「サービスの心」とは何かを教えなければならないであろう。

現場の図書館にあっては、レファレンスにたいする認識がまちまちで、館によってその姿勢には大きな差異がある。例えば統計一つとってみても、レファレンスサービスは、その質問の質・量・深淺の度合、それを受けた職員の能力、経験、専門性等々により処理を異にし、処



高山部会長の挨拶

理結果が計数化し難い業務内容でもあって、このため理事者に対する説明が相当困難を極めるものであった。

今回の発表においては、「情報サービス概説」と「レファレンス サービス演習」とに分けて、それぞれの科目にあって、どのような目的意識をもって、どのようなことを教授され、演習にあっては、課題提供・調査場所・調査方法の指導法、結果処理、評価等々実際に進められる方法についてももう少し具体的なお話も欲しかった。

そして研究発表方式でなく、問題点を抽出した研究討議方式の時間があっても良かったかと思う。

「レファレンス サービスは図書館におけるサービスの総合芸術である」と私は学生に申しています。

資料についての深遠な知識、資料の組織化についての技術、そして参考資料を駆使する方法、それに加えてIT化された情報の検索技能、人に対する接遇・応対態度と人格の陶冶等これらが総合されないと、よいレファレンスライブラリアンになることはできない。

デジタル社会とアナログ社会との狭間にあって、図書館サービスはどうあるべきか、図書館職員はどのような様に対応をしたならばよいのかを理解してくれる後進を育てたいとお話を聞きながら感じた。



佐々木鶴代（宇部短期大学）

講演1：棚橋佳子氏による「情報サービスの最近の動向と展開」は、ISI社の進んだ情報提供業務の紹介であった。横断検索による多様な情報検索、引用統計活用による研究評価などノーベル賞受賞者の野依良治のページを使っの説明もあり興味深かった。図書館学課程での教育プログラムも組めるとのこと、経済面その他の事情が許せばこのプログラムをISI社と大学側との両方で組み立ててみるのも面白いと思った。

講演2：石原幸子氏による「最近のレファレンスサービスの状況～インターネットを利用した事例紹介を中心に～」は、都立多摩図書館の事例紹介であった。都立多摩図書館は、個人貸出しは行わず、市町村立図書館へのバックアップサービスと来館者への閲覧サービス、レファレンスサービスを行っているとのことであった。レ

ファレンスは、FAX、E-mailでも受け付けている。充実したレファレンスサービスを垣間見た印象で、実際の現場を訪ねてみたいと思った。

講演3：松本和子氏による「最近のレファレンス状況～大学図書館～」は、慶応義塾大学三田メディアセンターの現状紹介であった。ITの進展によりWebの利用、資料のデジタル化など図書館業務に新しい技術が必要となり従来にもまして図書館員の研修が重要になって来ていることや、学生には冊子媒体の他に電子媒体の利用、Webサイトの利用とそれぞれのツールの使い分けと評価ができるよう利用指導が必要となって来ていることなどの説明があった。将来の方向として、主題専門家の養成が必要であるなど何点かの展望が示された。

公共図書館と大学図書館の最近のレファレンスサービスの状況紹介であったが、このような状況に役立つ人材を養成するにはどのような内容の講義や演習であるべきか、課題提起されたのだと捉え、一考してみたい。

授業の事例報告1：斎藤文男氏による「調査プロセス比較法（俗名：三多摩レファレンス探検隊方式）を用いたレファレンスサービス演習～明治大学のケース～」は、現場の図書館員対象の研修で行われている方式を用いたもので、学生が必死になり、しかし、いきいきと情報検索している様を彷彿させる報告であった。講師コメント付きの事例集の返却は、異なる回答事例が一覧できるので情報源へ接近する発想の違いが分かり面白く学ぶことができるし、講師のコメントが学生にとっては自分が調べたプロセスと回答に対する評価であり励みであり、素晴らしいものと思った。

私も毎回調査プロセスと回答を提出させ次回個々に返却している。15～20名の受講生なので一人一人に口頭で指導している。今回の報告の事例集配布は参考にしたいと思う。

授業の事例報告2：阿部悦子氏による「レファレンスサービス演習 実践と展望」では、演習結果をレポート提出から図書館学のホームページへ送信させることにしたとの説明もあった。

授業の事例報告3：堀込静香氏による「レファレンス演習 授業の事例報告」は、授業の内容等についての説明の後に「情報サービス概説」との関係について「演習」は本当に「概説」の後でよいのだろうか、参考図書の特質や利用法は演習から体得するので「概説」の一部

を「演習」の中に入れた方がよいのではないかとの提起があった。その他「情報検索演習」との関連や目録分類の知識が必要であるとの指摘があった。

ちなみに、私は一人で両科目を担当しているので「概説」と「演習」をある部分クロスする形で、また、「概説」の終わり頃の参考図書の解説の部分は「演習」への導入も兼ねて図書館で実物を見せて行っている。「情報検索演習」はレファレンスの一部として位置づけ、紙媒体を「レファレンスサービス演習」で、電子メディア、Webサイトからの検索を「情報検索演習」で行っている。

今回いろいろな方法の授業展開を学ばせていただきありがとうございます。企画運営担当の先生方のご苦勞に感謝いたします。



中西 裕

(昭和女子大学短期大学部)

図書館学教育のファカルティディベロップメントをめぐる集也会も三回目。今回のテーマはレファレンスサービスであった。筆者自身の担当科目であり、大いに期待して参加した。

棚橋佳子氏はISI提供の検索ツールが引用索引からフルテキスト検索・横断検索などを可能にするWeb of Knowledgeへと進化してきた現状について紹介をした。日々新たになる技術に追いつく困難さへの思いが募った。続く石原幸子氏からはインターネット情報を利用した都立図書館の質問回答の様子が紹介された。所蔵資料で回答する原則だったものが、条件付でインターネット回答を可とし、ホームページの信頼性確認の注意、検索年月日の告知などの内規が定められたとのことである。e-mailでの一般都民からの質問受付にともない、卒論の丸投げなどの問題点があることも提示された。つづく阿部悦子氏は、レファレンスサービス関連3科目の内容分析をしたうえで、デジタルカメラなどの機器を用いた参考図書の解説やホームページを開いての授業実践を紹介した。

松本和子氏はレファレンス現場についての多面的な分析をしたが、電子情報・Web情報を利用すると、とりあえず結果が出てきてしまうことで若い図書館員が安心し

てしまう問題点を指摘したのが印象に残る。また、授業でサーチエンジンの使い方をしっかり教えて欲しい、Htmlは図書館員にとって必須だと要望は強く受け止めた。図書館ではWebレファレンスも開始したが、利用数は非常に少なく、2、30年前と同じく、尋ねることが恥ずかしいという日本人の特性は変わっていない、参考図書の知識・ビジネスマインド・アウトソーシングデザインが必要、などの指摘もあった。

脱線を変えながら、いわゆる三多摩レファレンス探検隊方式授業の紹介をした斎藤文男氏の実践報告はわれわれも意識せずに行っているオーソドックスな方法であった。最後の堀込静香氏も演習方法を紹介。期末に発表をさせて検索の疑似体験をさせ、また人物調査が書誌作成をさせるとのこと。お二方とも長い経験から方式が洗練されていると感じた。

この日のテーマは情報サービス概説およびレファレンスサービス演習、情報検索演習の3科目にかかわるものであった。この3科目の内容の振り分けでは、多くの教員が苦慮し、試行錯誤をしているのが現状であろう。筆者自身は本属の大学では演習2科目をそれぞれ担当する通常の形をとっているが、非常勤を務める別の大学ではカリキュラム改訂に際して情報サービス概説とレファレンスサービス演習とを合体させた科目を設置してもらって、担当している。この方式が合理的だし、内容に重複や漏れがなくなると考えたからである。だが、それでも情報検索演習との関係については問題が残ることは言うまでもない。

インターネット情報を図書館業務および授業の中でどの程度利用するかという点も今や大問題である。使うと安易に流れるおそれがあるが、かといって無視することは考えにくい。少なくともメール送信のしかたや、ホームページの評価、ウイルス等の危険についても授業できちんと教えておくべきだろうと、発表者の方々の意見を聞きながら再確認した。

書誌作成を演習として課すかどうか、その場合にインターネット情報を利用することの是非と、安易な丸写しをどうやって回避させるかについて、悩みは深い。書誌作成をさせてもインターネットを利用して安易に作成してしまうから、この課題はもはや成り立たないのではないかと参加者の声さえ聞いた。

レポートのフィードバック、添削の有効性については

多くの方が実践していて、やはり手も時間も相当にかけて、努力をされているとの印象を得た。

授業である以上、成績評価をどうするかとの疑問の声もあった。このことは筆者も常に抱いているものである。単位がとれたかどうかだけにさせてもらえたらどんなに楽だろうかと考えることがある。レファレンス回答には絶対的な正解がないだけに難しいことだ。

集会に参加して授業についての多くのヒントを得ることができた。内容の非常に濃い催しであった。発表者や企画をされた方々に深く感謝したい。

情報サービスの最近の動向と展開

—ISI社の事例—

木本 幸子 (大妻女子大学)

引用情報を中心にした各種研究情報へのリンクと文献情報へのナビゲーションシステムの紹介があった。

ISI社のCitation Indexは、検索語による内容検索ではなく、引用情報を検索キーとして、研究分野間の概念の関連性を引き出す独特な索引である。このデータベースを利用した引用ランキングやインパクトファクターは、研究動向や研究者の質を図る指標として利用されている。世の中の情報環境の変化、新技術の登場に従って、よりユーザーインターフェースの良いサービスへと進化し続けている。

引用索引の考え方が1955年に登場してから、冊子体、オンライン、CD-ROMとその提供媒体が変化してきた。その利用形態は、いわば一方通行であった。Webの技術の登場は、情報利用の形態を変化させた。

1997年に登場した「web of Science」は、Webのインターフェースで引用索引を活用し、文献相互の引用関係をたどることにより、キーとなる文献から網羅的に幅広く必要な文献を見つけ出すことが出来るようになった。つまり、見つけた文献について、その文献が参考・引用している論文を見ることが出来るCited References、見つけた文献を、参考・引用して書かれた論文を探すTimes Cited、検索の結果見つけた文献が、参考・引用している文献と同じ文献を引用して書かれた他の論文を探すRelated Records等である。

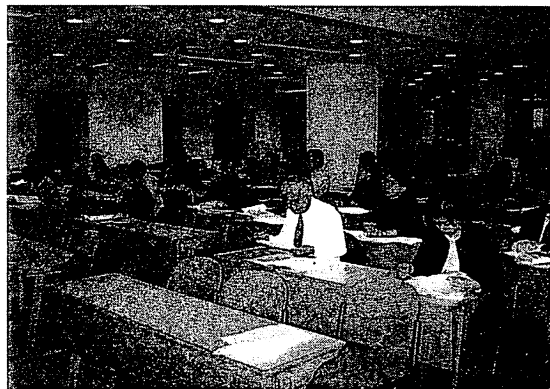
2001年には、Webの環境を活用した、一次情報を含む高度な学術情報提供のプラットフォーム「Web of Knowledge」が登場。引用情報を軸に、検索結果から電子ジャーナル（Science Direct、IDEALなど）、特許（Derwent Innovations Index）、ISI Proceedings、JCR、化学化合物情報、DNA、プロテイン情報、さらに外部データベースへとリンクが張られ、相互検索を可能にし、個々に独立して存在するデータベースを、同一のプラットフォームで利用できるようにした。ネット上で提供される様々なコンテンツと、ISIの書誌情報がリンク、引用情報をコアに学術情報提供の一元的プラットフォームが実現可能となった。

「Web of Knowledge」上の情報資源（コンテンツ）は、出版物、Webサイト、その他ISI社以外の外部情報源等を取込んでいる。特にWeb上の有用サイトとして5000のプレミアサイトが索引されている。収録誌数は約8500誌、そのうちコア誌は、約3500誌である。

ISI社の公開サイトでは、毎月1回TOP25の雑誌、論文、著者、組織について、自由に見ることができる。また、1981年から現在までの発表論文を対象に、最もよく利用された研究者のプロフィール、論文名、フルレコードを公開している。今後は250名程度まで掲載対象を広げる予定という。

今後は、Web上のドキュメントの全文検索を可能にし、検索条件指定から概念検索へ、単一インターフェースで多様な情報リソースの横断検索、等の新技術導入を目指すとしている。

最後に、Library Schoolでの研修プログラム提供の提案があり、Current Contents、web of Scienceを1学期間提供し、教育資料の配布、データベース利用サポートの用意があるとの紹介があった。



資料を参考に研修中

2001年度図書館学教育部会拡大幹事会（合宿）紹介

大谷 康晴（青山学院女子短期大学）

2001年度図書館学教育部会拡大幹事会が、2001年12月28、29の両日に、駿河台学園研修センターで教育部会幹事や部会幹事経験者等を集めて行われた。次年度の事業計画の検討に加え、現行の「司書」資格が問題を抱えていることを踏まえて図書館学の教育と研究の場を守り、併せて図書館界の発展にも寄与するための方策を検討しようという目的で開催された。

まず日本図書館協会における委員会再編の中から浮上している「養成機関審査準備タスクフォース」や「専門職員認定準備タスクフォース」について現状が紹介された。ここでは日本図書館協会の現状も踏まえながらこれらの特別チームの目指すところと問題点について議論を行なった。当面は委員会再編とこれらのタスクフォースの動向を注意深く見守るとともに、日本図書館協会のトップ及び関係者を招いてこれらの問題に関する図書館学教員の討論集会を開くことが計画された。

次に全国統一で図書館学に関する実力レベルを判

定する検定試験の導入の可能性について検討を行なった。これは、学歴や資格取得のルートを問わず一律に実力レベルを判定することで、採用試験等への活用や資格取得学習上の目標、現在の実力の再確認、教育現場へのフィードバック効果を狙うものである。この試験の形式や科目構成、時間等の実施要領、試験実施体制について議論を行なった。認定された実力レベルの扱い、受験者の確保、試験の運営体制についてクリアにしていくべき事柄は多いものの、検討に値するものであり、今後も継続して検討を行なっていくことになった。

最後に平成14年度の教育部会としての事業計画が検討された。充実した司書の養成のために上記にも取り上げた司書養成に関わる討論集会を行なうこと、さらに授業内容の向上のためのファカルティデベロップメントを継続すること、そして司書資格取得者の図書館就職の状況把握の調査を行なうこととなった。

編集後記

大寒も過ぎ、温暖な気候で、確実に春が近づいていると感ずる日々ですが、本格的な寒さはこれからなのでしょうか。アフガンの地の厳しい寒さを思わずにはいられません。来たるべき厳冬にそなえて、紙面のみでもと、暖かな色あいにしてみました。

さて、みなさまは2002年をどのような思いで、お迎えになられたでしょうか。一昨年のIFLAイスラエル大会では一見、平和なムードのなかに、21世紀は平和な世紀になるとの確信を持ちましたが、昨年は、一気に様々な矛盾が顕わにされ、人類が平和を手にするのはいつのことかと暗澹たる思いです。

今号はできるだけ早くみなさまに会合の情報をお届けしようと盛りだくさんな内容になり、頁数も多くなりました。記事によっては、文字が小さくなり、読みづらくなってしまいましたことを、お詫びいたします。

なお、顔写真がある方とない方がおられますが、編集子といたしましては、原稿依頼の際に写真の送付をお願いしております。これは、会員の皆様方がお互いにお顔を知っている方が望ましいのではないかとこちらが勝手に考えているからです。それで、お送りいただけただけの方のみ掲載しております。ご理解ください。

12月22日の研究集会の際にも、アンケートを書いていたいただきましたが、これは次号回しとさせていただきます。

今回は、総会を兼ねた研究集会となりそうです。詳細は、いずれ、『図書館雑誌』あるいは日本図書館協会のメール・マガジン等でご案内する予定です。ご期待ください。

時節柄お風邪など召しませぬように。(YS)